

◇ 砥粒加工研究会設立 50 周年記念特別企画 砥粒アーカイブス ◇

砥粒加工分野を切り拓いた人々 第 14 話



鈴木 憲二 氏

55 年前に思いを馳せて～青春編～

昭和 28 年 3 月 19 日（1953 年）

仙台から 10 時間以上もかけてやって来て、刈谷の駅頭に立った時は、既に夕闇も迫り、1m 先の人の顔の判別すらむずかしくなりかける頃でした。豊田工機労務課の N 係長が自転車で出迎えてくれました。この町では自転車が会社に行くにも、町に出るにも必需品との事。次に「西部劇の幌馬車の町並」を彷彿とさせるような裸電球の街並みが、「都落ち」と言う第一印象でした。やがて案内された寮の一室、アルバム片手に、薄暗い電球の下で“長い・長い”一夜を過ごしたのも、“苦しい”想い出でした。

しかし怖いもので、1 週間・10 日と経つ内に、感傷的な気分も全く失せてしまい、むしろ“わが町”的意識が勝るようになってしまいました。

翌 3 月 20 日、入社式

豊田工機の会議室で 3 代目・管社長の講話を聞かされました。内容は全く記憶しておりませんが、朝鮮動乱の影響で多くの汎用工作機メーカは濡れ手に粟の好況下にあるが、一方、豊田工機をはじめ、専用工作機械メーカの悉くは通常の 1/10 以下の受注しか期待できない状況である。特に、私が担当する予定の大型多軸専用機は、惨めな状況下にあるとのことでした。そんな状況下で若い技術者を昨年のように大量（？）に採用する会社の意気込みと共に感覚を覚えたものでした。

フランス国・ジャンドルン社との技術提携

更に、会社として雌伏 3 年、給料カット・人員整理など、苦難の連続でした。

一方、政府・工業会の肝煎で、海外の情報も数多く知る状況にもありました。その内の情報源の 1 つとして、元顧問の早坂力氏の御好意でフランス・ジャンドルン社との技術提携の吉報が寄せられました。

その結果を基に、中興の祖といわれた富田環常務（後会長）を先頭にフランスのオリジナル製品以上の製品を作り上げることが出来ると信を得、交渉は順調に進行しました。

<ご略歴>

鈴木 憲二 (Kenji SUZUKI)
1929 年生
元・豊田工機㈱ 参与部長
元・豊田バンモップス㈱ 社長
専門分野：研削加工、工作機械、静圧軸受、
半導体圧力計、ダイヤモンド工具
工学博士 “総型研削におけるダイヤモンド・
ロータリ・ツーリング技術の研究”

〒472-0011 愛知県知立市昭和 2-9-2
TEL/FAX 0566-81-2954
e-mail ken_suzu@kba.biglobe.ne.jp

（学会受付日：2008 年 8 月 25 日）

れに先立ち、西坂誠三氏（当時：課長・後常務）は単身フランスにのりこみ、3 カ月間、フランスの長所を広く導入し、国内の同業各社にまでもその情報を広く広めた功績は特筆に値すると思います。

当時、研削盤は国の援助もあり、毎年、東京・大阪で交互に開かれる国際工作機械見本市には、各社が挙って出品されました。勿論、各社の若手技術者は、夫々の機械の前で自社の機械の優位さを PR しあつたものでした。

多勢に無勢、集中放火の矢面は新顔の静圧軸受、参会者の常連は大隈鉄工の武野仲勝氏・長岡振吉氏・三井精機の横川和彦氏・名古屋市公研の安藤芳郎氏・豊田工機の私などで、「動圧軸受か静圧軸受か？」をテーマにした論争は、いつ果てるかの状況で、ユーザーを巻き込んでの勝負は尽きませんでした。

見本市の成果として、静圧軸受について、更に具体的な説明を聞きたいとの要望に応えるため、個別でデモ・展示を開催すべく全国行脚を計画することになりました。各県の工業会の御理解を元にし、水戸市を皮切りに、北は北海道、南は四国、西は福井地方と、1 カ所 2 日の強行軍でした。説明会は 13 時から始め、19 時まで。19 時終了後には機械の一部を解体し、真夜中に次の目的地へ走ると言う強行軍でした。誰の発案か聞き漏らしましたが、実に時宜をえた対策と感嘆したものでした。特に静圧軸受は好評をうけました。

私は当時、一番若く、尖兵として多くを学びました。日本全国を飛び廻ると言う経験は大変良い勉強になりました。

東北大特別研究生、砥粒加工研究会に入会

昭和 32 年 4 月、技術提携の目玉である静圧（流体）軸受の指導をお願いするために、東北大学の佐藤健児教授の室に 1 年間の特別研究生として派遣されることになりました。早速、小型の研削盤（油圧駆動・静圧軸受）を持ち込み使用することになりましたが、実験用空気軸受本体は派遣期間中には間に合いませんでした。しかし油圧でも空気圧でも理論は全く同じで、理論通りの結果を得る事が出来、開発に意を強くした次第です。

先生は実に清廉潔白な師であり、九州男児の先達でありました。例えば、出勤・退社時間を例にとっても、“大学教授とは云っても所詮は国家公務員”、8 時出勤・5 時退社を厳守、勿論、昼の食事時間は 12 時からの 1 時間を厳守を実行されておられました。青天の日はテニス、雨天の日は卓球と言った具合。又、予算経常の実施にも正確が主義、間違いは許されませんでした。

又、先生は砥粒加工研究会の設立実行委員のお一人で、その実現に奔走されておられました。当然私にも入会の勧誘



(故)佐藤健児教授との二人旅(熱海)。左が筆者

がありました。35年春と記憶しておりますが、若手精銳30~40名が文京区の理化学研究所の正門近くの研究室に集合し、今後の健闘を誓って乾杯を挙げたものでした。

早速、実行計画案で熊谷直次郎先生を会長に、小林昭先生・佐藤健児先生などが実行委員に決定しました。月刊誌の発行・欧文誌出版・翻訳・欧文技術用語集など、私も欧文技術用語辞典の編集の1員に名を連ね、毎月、1週間缶詰での編集会議などで、具体的に実効案を練ったものでした。

熊谷先生からは、「越乃寒梅」を入手した。どうだ、目黒の自宅に飲みに来ないか」とのお誘いも再三頂きました。かくして砥粒加工研究会の先生方もともお近づきになりました。身に余る光栄、これに勝るものなし。

一方、(故)山梨大学助教授・織岡貞次郎先生は東大に学位論文(研削機構の研究)を提出中とのことでした(一部保存)。その後、「病中にあり」との便りを最後に音信不通。意気投合の同志なれば、一層、哀れが嵩む。

昭和50年・不況蔓延

東京オリンピック後の不安蔓延し、

超小型センサーの事業化の検討

東京オリンピック後の円高不況は戦後最大規模に達し、景気予測が困難になりました。豊田工機としては社内に埋もれている企業の種を育てることを真剣に提案。その第一候補として、静圧軸受のテストに試作使用した半導体圧力計を企業ベースに拡張する事になりました。

この圧力計は豊田中央研究所・五十嵐伊勢美主任研究員の発案になるのですが、静圧軸受の研究に抜群の成果をあげたものでした。その結果、超小型加速度計など、逆に中研より共同研究の申し出がくるようになりました。共同研究の成果はダイヤフラムの径を $10\phi \rightarrow 6\phi \rightarrow 3\phi \rightarrow 1\phi \rightarrow 0.5\phi$ にする事が出来、血管内圧やロケットなどの姿勢制御、その他医学部門、機能検査など、幅広い教育分野の貢献も期待出来ます。幸い協力を誓ってくれた方々(久野皓氏他数名)が続出しました。

この分野での需要の開拓には、尋常の手段では対応の困難さは火を見るより明らかで、“超音速飛行体”“3次元飛行体

の姿勢制御”“魚群探知”etc、“切り込み隊長のつもり”をモットーに、可能性の探索に没頭しました。今後30年、この分野は1大事業部として健在することであろうと確信しております。

わが砥粒アーカイブス人生の完結編(25年)

砥粒加工分野への専念に再び回帰する幸運にめぐまれました。今回の再帰は本格参入で、ダイヤモンド工業会の一員となることをも意味していました。

しかしスタッフは5人、資本金7500万円、所持金1億円未満の小世帯なるも、意志強固の若手揃いに貸事務所。メシの種には豊田工機在職中の研究論文55編、関連論文26編・特許実案64点があるだけ。この会社を業界1にするためには、得意分野を徹底的に日本一にすることであり、ユーザーからの信頼を絶対のものにすることであると考えました。

現在、従業員は200人を超え、売上は(年)50億円超、初期の目標達成は指呼の間にあります。

今後はダイヤモンドロータリドレッサーのダイヤモンドセッティングのNC化と、ダイヤモンド工具製造の徹底した自動化を図り、最新の自動車のカム研用CBN砥石、ダイヤモンド工具専用加工機を重点的に日本一に育成する目標を定めることが涵養であります。この完結編の達成こそ、近々の目標です。

この企業に入社してからすでに20年、初期の目標を達成しつつあります。この計画達成の1過程で、「CBN砥粒使用量が世界中でNo.1会社」の榮誉を得たことを祝し、GE社から私個人に対して“Mr.ボラゾン”的称号と記念盃を頂戴しました。社長在任中は数度にわたる不況の波も打ちかける波の如く到来しましたが、無事20周年を迎えて、今後の健闘を祈る立場となりました。

私がこの豊田バンモップス株式会社・創立20周年を目前に引退し、顧問(4年間)も退任して以来、10数年が経過しました。やがて身辺の整理をせざるを得ないことでしょう。社長を引退したのを期に、この青春編・完結編を中心に、学位論文に集約しました。

55年前、一介の浪人の如き青年が今、やがて80才。書き連ねた論文集も70編を超えていました。次期経営者に、これら全てを移管いたします。

最後に、国内外の万余のお客様にエールを贈りたい。中でも、豊田自動織機・トヨタ自動車・デンソーのトヨタ関連各社、光洋精工、THK、FORD、ルノー、ボルボなど、国内外の200社を超える皆さんに、感謝の誠を捧げたいと存じます。



佐藤研究室の一員、八木山植物園にて
(右端は尾崎省太郎氏、左から4人目が筆者)